

白金台のタワマン最上  
階で別れを告げた夜に  
レーシングドライバー  
から黒塗りリムジン後  
部座席に連れ込まれて  
朝まで降ろしてもらえ  
ないカントボーイメカ

ニック

「乗って」

革靴の踵が、コンクリの床をかつん、と鳴らした。

その音が合図みたいに、僕の喉の奥がひゅっと詰まった。背筋を駆け上がってきたものが何だったのか、自分でも分からない。逃げろと叫ぶ本能と、もう逃げられないと諦めている膝の震えが、つなぎの中で同時に軋んだ。

白金台のタワーマンション、地下三階駐車場。蛍光灯がジジ、と虫の死骸みたいな音を立てる。目の前には、黒塗りのストレッチリムジン。隣に立つ架神蓮司の、銀縁メガネの奥でだけ瞳孔が開いていた。

「専属契約、今夜限りで……辞めさせて、ください」

声が掠れた。二年間言えなかった台詞を、今夜やっと吐き出した。それなのに、口にした瞬間からもう、背後のリムジンの低い唸りが、僕の腰を絡め取った気がした。

「うん、聞いた」

蓮司の指が、僕の頬を撫でた。指先に、ガソリンと、革と、香水の匂いが絡む。たぶんブルガリの、スパイスの効いたやつ。

「けど、ひとつだけ確認させて」

空調が、ふっと止まった。

「乗って。話そう」

「……乗りません」

「巧」

名前を呼ばれただけで、お腹の奥がきゅうっと締まった。  
——認めたくない。何を反応しているんだ、僕の身体は。男のくせに、その奥にある女の場所が、声ひとつで濡れ始めるなんて、嘘だ。

「降ろしてくれるなら、乗ります」

「降ろすよ。朝の六時に」

「は……？」

返事の代わりに、腕を引かれた。

革のシートに、つなぎごと放り込まれる。背中が琥珀色の間接照明に晒された。ボタン、ではなく、ヒュッ、と空気を吸い込むような音でドアが閉まる。電動でスモークが上がった。外の世界が、一秒ごとに、すりガラスの向こうへ霞む。

「あ、待って——」

「俺の隣、来な」

シャンパンクーラーの中で、氷がころん、と崩れた。

その音だけが、やけに澄んで耳に届いた。

——

「シートベルト、締めるよ」

「自分で、やります……」

「いいから」

蓮司の身体が覆い被さってきた。香水と排気ガスが混ざった匂いが、鼻先で爆ぜる。長い指がベルトを引き、僕の胸の真ん中を斜めに横切らせた。

カチン。

留め金が鳴った瞬間、身体の中で、別の何かまで留められた気がした。

「これ、緊急時しか外せないやつ」

「……は？」

「後でね」

リムジンが、滑り出した。地下のスロープを上がる遠心力で、革シートに頬が押し付けられる。冷たい。なのに、押し付けられた頬だけが、じわじわ熱い。

「降ろして、ください」

「無理」

「蓮司さん——架神さん、本気で言ってます。僕は」

「本気だから、二年待ったんだよ俺は」

首都高の入口。タイヤがジョイントを叩く音が、お尻の下から響いた。サブウーファーの低音が床から這い上がり、太腿の内側を撫でる。

(——やだ、なに、これ……っ)

振動が、つなぎ越しに、内側のあの場所まで届いた。僕は咄嗟に膝を閉じる。閉じた途端、自分の太腿のあいだに既に湿り気が生まれているのを、感じてしまった。

まだ、なにもされていないのに。

「お前さ、車に乗ると黙るよな」

蓮司は隣に座って、長い脚を組んだ。膝が、僕のつなぎの太腿に、軽く触れる。それだけだ。それだけなのに、触れた箇所を中心に、皮膚がじわっと粟立つ。

「整備のとき、エンジンに耳当ててるとき、お前、本気で黙る」

「……仕事ですから」

「俺の心音まで、聞き分けたよな。二年前」

「やめて、ください」

「やめないよ」

指が、つなぎの胸元のジッパーに触れた。ジー、と金属の歯が外れる。下に何も着ていない僕の鎖骨が、間接照明の琥珀色に照らされた。

「あ——」

「このつなぎ、何回見たかな。脱がせ方も、もう覚えた」

「いつ、覚えたんですか、そんなの」

「想像でずっと」

ジッパーが胸の真ん中まで下りた。蓮司の指がそこから入り込む。骨ばった指先が、鎖骨のくぼみを、ボンネットを撫でる角度でなぞった。エンジンルームの配線に触れるときの、あの繊細さで。

（っ、こ、これ、エンジンに触るのとおなじ、手つき……っ）

その一瞬で、僕の身体が分かってしまった。

この人は、僕を機械と同じ手で触っている。優しくて、執拗で、絶対に逃がさない手。

「ふ、うっ……」

声が漏れた。漏れた瞬間、隣の蓮司が低く笑った気配がした。

「振動、強いだろ？」

「ち、ちが——」

「お前、いま、無意識に呟いてた。『振動、強い』って」

言っていない。言っていないはずだ。けれど、頭の奥のもうろうとした霧の向こうで、自分の唇が動いた気がした。サブウーファースの低音が、ずっと、お尻の真下から振動を送り続ける。

「あ、待っ……」

「待たない」

蓮司の指が、僕の乳首を掠めた。

ピリッ、と電気みたいな感覚が走って、背中が反る。シートベルトが胸を強く食い込ませた。逃げ場が、ない。

「……っひ、うっ♡」

漏れた声に、♡が混じった。自分で分かった。男の声じゃない。男のはずなのに、女の場所が反応する身体が、女の声を手勝手に作る。

（やだ、いやだ、こんな声……っ）

「ほら、もう声が違う」

蓮司は楽しそうだった。シャンパンクーラーから氷を一粒、指でつまみ上げる。透明な氷が、間接照明を吸ってきらりと光る。

「レース前のアイシング、知ってる？」

「し、知らな……」

「筋肉、ゆるめるの。これでね」

氷が、僕の右の乳首に押し付けられた。

「ひっ——!? つめ、つめた……っ♡♡」

冷たさが、ぴりっと突き刺さって、すぐに焼けるような熱に変わる。乳首が一瞬で硬く尖り、つなぎの中で蓮司の指に挟まれた。

「な、で、なんで……っ」

「冷やすと、ゆるむんだよ。筋肉も、警戒心も」

氷が溶けて、鎖骨を伝って流れた。冷たい雫が胸の谷間に落ちる。蓮司の舌が、その雫を、首筋から鎖骨まで、ゆっくり追いかけて舐め取った。

「ふあっ、っ……あっ♡♡」

舌が熱い。氷が冷たい。同じ皮膚の上で、温度差が暴れる。皮膚が分からなくなる。どこが冷たくてどこが熱いのか、もう区別がつかない。

（こ、これ、変……っ、身体、おかしくなる……っ）

乳首を冷やされて、また舌で温められて、それを左の乳首にもされて。冷氣と熱気がローテーションで攻めてくる。冷たい氷の角が、立ち上がった乳首をカリッ、と擦った刹那、僕は喉の奥でひゅっと息を吸ってしまった。

「気持ちいいだろ」

「ち、ちがいま……っ」

「ちがう？」

ぐ、とつなぎの腰のあたりを掴まれて、ぐいっと下げられた。下にはボクサーパンツしか穿いていない。そのボクサーパンツも、もう、太腿の内側に、湿った染みが広がっていた。

間接照明の下でも分かるくらい、はっきりと。

「お前のここ、もう泣いてるよ」

「い、嫌、み、見ないで……っ♡」



蓮司の長い指が、ボクサーパンツの上から、僕の股のあいだをすうっとなぞった。

「ひっ——♡♡♡」

布越しなのに、稲妻が走った。

カントボーイの身体。男のなりをした僕の、内側にだけ女の器官がある身体。ボクサーパンツの下、その湿った染みの中心に、ぷっくりと尖っているクリトリスがあって、そこを蓮司の指の腹が、布越しにくにゅ、と押した。

「あっ♡♡」

「ここ、効くんだな」

「ち、ちがう、それ、ち、ちがいま——あっ♡♡」

くにゅ、くにゅ、くにゅ。蓮司の指が同じリズムで小さな突起を押す。布が湿って、肌に張り付き、その布と一緒に擦れる。じわじわ広がる快感に、僕の腰が勝手にカクン、と前にしゃくれた。

「腰、動いたね」

「動いて、ない……っ」

「動いた」

蓮司の声が、楽しそうに低くなる。整備工場で、車のキャブレターを覗き込むときと同じ声。「ここが詰まってるね」と発見したときの、あの満足げな声。

（や、やめ……同じ声で、ぼくの、こんな所、見つけなくて……っ）

ボクサーパンツの上から、指が下に滑った。今度はもっと奥、太腿の付け根の、その真下の場所。男の身体には絶対がない、僕にだけある、女の器官の入り口を、布越しに指の腹がぐにゅ、と押した。

「ひいっ♡♡♡」

「ここ、入り口だろ。お前のカントの」

「い、言わな、言わな、で……っ♡♡♡」

布が、僕の愛液で、もう蓮司の指型に張り付いていた。蓮司の指がぐっと押すたびに、布が割れ目の中にめり込んで、敏感な肉ヒダを直接擦った。

「ふあっ、あ、っ……んあっ♡♡」

「ぐっしょりだな」

「い、いや、見ないで、見ないでくださ……っ♡♡」

「合意?」

「は……っ?」

「合意ね、もう取ってるよ」

蓮司の顔が、僕の耳元に來た。低い、息のかかる声で、囁いた。

「二年前、お前が俺のエンジン触った瞬間に」

——ぞくっ。

背筋を、寒気とは違うものが駆け上がる。

二年前。整備工場の一角。マスコミ向けに笑顔を作って降りてきた蓮司が、僕の前でだけメガネを外して、「お前が触れ」と言った日。あの日から、蓮司は僕に「触られていた」のではなく、僕の方を「触っていた」。

二年。

二年もずっと、見られていた。

「な、にを、言って……っ」

「タワマンの最上階、二年前から借りてた。お前を住まわせるために」

「は……は？」

「契約破棄?無理だよ。お前はもう、俺の整備対象なの」

頭の中が、白んだ。

その白んだ視界の中で、蓮司の指がボクサーパンツを引き下ろす。ぴた、と肌に張り付いていた布が、太腿の真ん中で湿った音を立てて剥がれた。

ぐちゅ。

空気に晒されたその場所が、間接照明の下に晒される。男の脚の付け根の、絶対に他人に見せてはいけない場所が。

「あ、見ない、見ないで……っ♡♡♡」

「綺麗だよ、相変わらず」

「ち、違う、ぼくは、男で、こんなの、ぼくの本当の、身体じゃ……」

「カントボーイのお前が、お前だよ」

---

シートベルトが、僕を縛り続けている。胸を斜めに横切る帯。動けない。シートに身体が押し付けられて、脚だけがだらりと開かれる。蓮司の長い指が、僕の太腿の内側に滑り込み、ぐいっと押し開いた。

膝の裏を、革のシートに付けさせられる。冷たい。冷たかったはずの革は、もう僕の体温を吸って、ぬるい温度に変わっていた。

「指、入れるよ」

「ま、まだ、はなし、合意、して、なっ——ひいっ♡♡♡♡」

ぬぷ、と、蓮司の長い中指が、僕のカントの入り口に潜り込んだ。

「あっ♡ あっ♡ や、っ……」

濡れすぎていて、ほとんど抵抗もなく根元まで一気に咥え込んだ。中指一本で、僕の中の柔らかい肉壁を、ぐ、と押し上げる。何かを探すような動きで、第二関節までを使って、ゆっくり中を撫でた。

「狭いな、相変わらず。けど、もう、震えてる」

「い、いやっ、抜いて、抜いて……っ♡♡」

「お前さ、二年間、誰にもここ触らせなかったろ」

「な、なんで、それ……」

「分かるよ。お前の整備した車のエンジンに、二年間、俺以外の手の脂、付いてなかったから」

——こいつ、おかしい。

二年間、僕が触った車のエンジンルームを、嗅ぎ分けてきた。エンジンルームの脂で、僕が他の男に触られていないか、確かめていた。

「やめて、もう、やめてください、本当に、こわ……っ♡♡」

「怖いのか?」

蓮司の指が、二本目を加えた。ぐぷ、と肉ヒダが押し広げられる。同時に、親指がクリトリスをくにゅ、と押し潰した。

「ひぐっ♡♡♡」

「怖いのに、こんなに濡れんの?」

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ。

二本の指が、リムジンの振動と合わせて中で動く。サブウーファアの低音と、首都高のジョイントの揺れと、蓮司の指の角度が、絶妙に重なって、僕の中の弱い場所を勝手にこすり上げる。

「おっ、おっ♡♡ 揺れ、揺れ、揺れて……っ♡♡ 振動、と、ゆび、いっしょに……っ♡♡♡」

「いま、何キロ出てると思う?」

「し、知らな、っ……」

「160。お前、いま160kmで指でかき回されてんだよ」

「ひっ、ぐ……っ♡♡ そんな、こと、ゆ、わな……あっ♡♡」

走っているリムジンの中で、指で犯されている。その事実を、わざわざ速度で言葉にされた。頭の芯が、その数字を聞いただけでびくびく痺れた。

（や、やだ、ぼく、こんな状況で、感じて……っ、男なのに、こんなことで、おまんこ、濡らして、ぼく、なに……っ）

心の中で、自分を罵る。男のプライドを、必死で握りしめる。整備士であって、愛人じゃない。整備士であって、雌じゃない。

なのに、僕の中の女の器官は、その罵倒の声を聞きながら、蓮司の指を奥へ奥へと吸い込んだ。

「お前の中、俺の指、しゃぶってくる」

「し、しゃぶって、なっ、ない、です……っ♡♡」

「しゃぶってる」

ぐちゅん、と奥を押された。

刹那、僕の腰が革のシートからぐっと浮いた。シートベルトに胸を引っ張られて、苦しいくらいに身体が反る。

「おおあっ♡♡♡」

「ここね、子宮口。覚えとけ」

「し、しきゅう、ぐ、っ……♡♡♡」

「お前のカントには、子宮もちゃんとある。二年前、お前の医療カルテも見たよ」

——全部、知られていた。

二年間、僕がひた隠しにしてきた身体のことを、この男はとうに知り尽くしていた。カルテまで見ていた。整備士として雇われていた間、僕は標本にされていた。雌として、観察されていた。

嫌だ。

嫌なのに。

そう思った刹那、僕の中がきゅうっと締まって、蓮司の指を内側から強く吸った。

「お前の中、いま、すげえ正直」

「い、いや、っ、ちが、いまの、ちがっ……あっ♡♡♡」

——ぐちゅん、ぐちゅん、ぐちゅん。

指が三本になった。

いつ増えたか分からない。気付いたら、三本の指が僕の中をかき回していた。ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅっ、と、走行音より大きい卑猥な水音が車内に響く。スモークガラスの向こうで、首都高のナトリウム灯がオレンジに流れた。

「あっ、あっ、はっ、はっ♡♡ や、おく、奥、こすら、な——♡♡♡」

「奥、もう降りてきてんね。子宮口、お前から俺の指迎えにきてる」

「ち、ちがっ、う……っ♡♡♡」

「ちがわないよ」

ぐちゅん、と一番奥を押された刹那、僕の太腿のあいだから、ぱしゃ、と水音が散った。

「ふあっ、♡♡ なに、なに、これっ……♡♡♡」

「軽くイッたな」

「い、ってなっ、っ……♡♡♡」

「イッたよ。お前のここ、ぴくぴく言ってる」

革のシートに、僕の愛液がぽたぽた落ちた。間接照明に照らされて、それが琥珀色に光って見えた。シャンパンの色と、同じ色。

「シャンパン、開けようか」

蓮司が、僕の中から指を抜いた。

ぬるん、と熱い指が引き抜かれて、すぐに、もう失った感覚に身体がきゅうっと寂しさを訴える。

嘘でしょ、これ。

抜かれて、嫌だなんて、思ってるんですか、僕。

――

シャンパンの栓が、ぽん、と抜けた。



ストレッチリムジンの長いキャビン。その奥行きの中央に置かれたシャンパンクーラーから、蓮司が細長いフルートグラスに注いだ。泡が、サブウーファーの低音に合わせてゆらゆら揺れる。

「ほら、飲み」

「い、いりま、せ……」

「飲まないと、もたないよ」

蓮司の指が、僕の顎を持ち上げた。グラスの縁が、唇に押し当てられる。冷たいシャンパンが流し込まれて、僕は咳き込みながら飲んだ。喉が冷えて、お腹が冷えて、けれど、その冷たさが股のあいだの熱だけを、より際立たせた。

「いいね、その目」

「な、に、が……」

「もうトロンとしてる」

蓮司の手が、僕のつなぎを完全に脱がせた。腕を抜かれて、腰の下から引き抜かれる。シートベルトだけは、外されなかった。革のシートの上で、生まれたままの僕が、革の帯一本だけで縫い留められた。

「腰、こっちに」

「あ、っ……」

蓮司が革シートに座って、長い脚を投げ出した。蓮司のスラックスの股間が、もう、はち切れそうに盛り上がっていた。

蓮司はそこを、ベルトと一緒にゆっくり緩めて、自分の肉棒を取り出した。

——大きい。

二年間、何度も視界の隅に映ってきたシルエットの、その実物が、今夜、僕の真上に現れた。

太くて、長くて、血管が浮いて、先端から既にとろりと先走りが垂れる。間接照明に照らされて、それが、僕の中の愛液と同じ色をしていた。

「跨れ」

「む、無理、です、そんなの……っ」

「無理じゃない」

シートベルトを外されないまま、肩を引かれて、蓮司の腰の上に座らされた。シートベルトが斜めに胸を横切ったまま、僕の身体は蓮司の上に乗せられて、その下に、肉棒が真上を向いていた。

「ま、まって、ほんとに、まって、まだ、心の、じゅんぴ、が……っ」

「心の準備、二年待った」

ぐ、と腰を掴まれた。

真上から、僕の身体が、ゆっくり下ろされる。

蓮司の先端が、僕の太腿のあいだの、濡れすぎたカントの入り口に、ぴた、と押し当てられた。

触れた刹那、僕の中が、きゅうっと寄った。先端を吸い込もうとする動きで。男のなりをした僕の女の場所が、勝手に、雌の動きで、迎え入れようとした。

「あ、あ、あ……っ♡♡♡」

「自分の身体、よく見とけよ」

蓮司が、僕の顎を上向かせた。視線が、自分の太腿のあいだに落ちる。蓮司の太いものが、僕の濡れた割れ目に押し当てられて、ぐ、と入り口を割り開く光景が、間接照明の琥珀色の中に、はっきり見えた。

「やだっ、見たく、ない、見たくな——♡♡♡」

ぐぶん。

先端が、めり込んだ。

「ふぐっ——♡♡♡」

ぐぶ、ぐぶ、ぐぶ、と、僕の体重で、勝手に、奥へ奥へと、蓮司の肉棒が侵入する。シートベルトが胸を強く食い込ませて、僕は呼吸ができない。

そして、最後に、ずぶん、と。

根元まで、収まった。

「ひい——っ♡♡♡ おく、もう、おくう、ふう、っ♡♡♡」

「初めての、生のチンポ、どう？」

「ぐ、っ……あ、っ……お、おなか、押し上げられ、て……っ♡♡」